慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一般化判断の一研究
Sub Title	A Study of Generalizing Judgment
Author	斉藤, 幸一郎(Saito, Koichiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1960
Jtitle	哲學 No.38 (1960. 11) ,p.307- 329
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this study was to develop a method to decide the degree of generalizing judgment about the events in every-day-life, and to ascertain its relation to the sex and age of the subjects and their personality traits. Fifteen questions printed on a sheet were given to each subject. The construction of each question was: (1) a statement was give about a particular behavior of a certain imaginary person, and (2) four alternatives were given in short sentences stating the characteristic of the individual which was classified in accordance with the degrees of decisiveness. The subjects were asked to choose one of the four alternatives in their own judgment regarding how decisively the imaginary person owns the characteristic. The subjects in this study consists of second year students of junior high school, and the first and third year students of senior high school. The results obtained was that boys showed significantly higher level than girls in generalizing judgment and that this tendency decreased as the age increased both in boys and girls. Another study was devised utilizing the same questionnaire. This time, college freshmen were used as the subjects. In this study, the correlation was sought between the questionnaire and thirteen traits acquired from a personality inventory arranged by the staff of student personnel department. The result showed that the score was between +0.1 and -0.1 - very close to 0 - in any one of the thirteen correlation-coefficients.
Notes	横山松三郎先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000038-0332

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一般化判断の一研究

斎藤幸一郎

I. 序　　論

実験室的場面においても，生徒たちが学校の教室で授業をうけるといつた場面においても，あるいは，日常生活の場面においても，人が刺激に直面するときにはつねに，ここにとりあげようとする「一般化判断」ともいうべき心的過程が随伴する．「一葉散つて天下の秋を知る」といつた判断，「犬が尾を振りながら近づいてきたからおそらくかみつくようなことはあるまい」といつた判断，はじめて会つた人の一言半句の言葉づかいからその人の教養の程度や人がらを見通すといつた判断等は，いずれも，その判断者が，その場面に対してみずからどのように対処したらよいかを決定するために必要な判断なるがゆえになされるのである．すなわち，そこに起つていることは，人が個個の刺激をそれとしてただ受動的にうけとつているという過程だけでなく，その人がこれからとるべき行動への橋わたしとしての能動的な媒介的な過程なのである．すなわち，人は，実際的にかあるいは試験的にかともかく外界に対する働らきかけとしての行動をとろうとする場合に，個個の刺激という形であたえられる外界からの情報にもとづかざるを得ないが，これらの情報がきわめて不十分な場合には，少数のあるいはただひとつの情報を材料として，これに対して彼自身による一般化判断をあたえて，その判断の結果にしたがつて行動せざるを得ないこと

となる.

要するに，一般化判断は，常に人がなんらかの実際的な行動を決定しなければならないときにその人に強いられるものであり，しかも，決定が急を要するものであればある程，ある一つの現象から一般化された結論がひき出される傾向は強くなり，また，決定に必要な思考の材料としての外界からの刺激が乏しければ乏しいほど一つの刺激から一般化判断がなされる傾向は強くなる，と仮定することができる.

しかしながら，人が現在直面している場面の性質が，上に仮定された意味において，その人にある程度の一般化判断を要求するようなものであるとしても，その人の判断における一般化の方向と強度とはそのときの場面の性質のみによつて規定されるのではなく，同時に，その人のこれまでの過去の経験の蓄積，すなわち学習の結果によつても規定されるものと仮定しなくてはならない．すなわち，判断における一般化が可能であるためには，学習に際しての一般化過程の蓄積がその人の中において形成されていなくてはならないのである．過去において学習における一般化過程がすでになされていなければ，現在の判断に際しても，そのときの場面が如何にそれを要求していようとも，一般化判断は生起し得ないであろう.

この学習に際しての一般化過程については，G. Humphrey (1) が，「一般化とは，多様に変化する条件下にあつてもなおかつ不変のままに保たれている特徴もしくは特徴群に対し，有機体がある恒常な変容をなしとげてゆく過程である．(P. 265)」と定義しており，また，「抽象と一般化とは密接に組み合わさつて学習がなされる．(P. 266)」と述べているように，学習における一般化には抽象の過程がある意味で表裏をなして相伴つているのである．すなわち，有機体は，経験を重ねてゆく過程において，直面する場面に含まれる不適当かつ無関係な，そして偶然的任意的な特徴を無視し排除するという抽象作用をいとなまなければならず，それと同時に，そ

の場面において常に繰返されるあるひとつの，あるいは一連の特徴に対して一定不変の反応形式を形成してゆくのである．学習における一般化とはこの後者の過程に注目したときにうかび上つてくる概念である(註1)

たとえば，一般に学習に関する実験的研究では，あらかじめ実験者によつて繰返しあたえらるべき刺激場面が用意される．すなわち鼠をして同一の迷路を繰返し走らせる場合のように，有機体にあたえられる場面はできる限り一定不変に保たれるように十分な配慮がなされる．もちろん，このような場合でも，あたえられる場面が客観的には同一であつても，有機体によつて，試行を重ねるにしたがつてはじめには通つていた袋小路が次第に無視されることからも証明されるように，有機体に「とつて」の場面は幾らかづつ変化してゆくのであり，実はそのような変化の過程こそ学習に他ならないのである．しかしながら，一般化の過程を追究しようとする実験的研究の場合には，有機体に対してあたえられる刺激場面は，全試行を通じて一定不変ではなく，むしろ，実験的な計画にもとづいて試行ごとになんらかの変異が設定されることが必要となる．人間を対象としたこの種の実験には，人工的な視覚的刺激としての図形に無意味綴字もしくは音節を組み合わせて提示するといつた方法による S. C. Fisher (2), C. L. Hull (3), 等の研究，および，実験者が任意にあらかじめ設定した法則を被験者に発見せしめようとする E. F. Heidbreder (4) の研究などがある．

さて，本研究もまた一般化の過程を対象とするものであるが，厳密には一般化の学習の過程ではなくして，一般化の判断の過程のみを観察している．すなわち，上述のような実験的研究の場合には，いくつかの変異性のある場面からなる刺激系列を一通り，あるいは何回か繰返して，被験者に対し提示し終つた後において，そのときまでに被験者が獲得した一般化の程度が，なんらかの方法で，観察される，というように，実験手続は，経

験ないしは学習の段階と，観察ないしは検査の段階とにわかれているのがふつうであるが，本研究の場合には，前者の段階は日常の経験に任かされており後者の段階のみが，質問紙法による調査の形で実施される．

被験者たちの経験ないしは学習の段階が，本研究の場合には，実験的な統制の外にあるという意味では，研究法上の厳密性において不十分な点なきにしもあらずである．しかしながら，本研究において取り上げられるような，比較的日常生活に密接した素材についての一般化を問題にしようとするときには，経験ないし学習の段階についてまでも実験的統制を加える必要はなく，また，そうしたからといつて決して条件を単純化することにはならない．むしろ，かえつて条件を複雑化することにならないとも限らない．それと同時にまた，本研究において，強いて日常生活に密接した素材をとり上げ，被験者の経験ないし学習の段階を自然のままにまかせたことには，別な積極的な意義もある．というのは，そうすることによつて，比較的限られた短時間あるいは短期間における経験によつて成立する一般化の過程ではなくて，数年ないし十数年の比較的長期間にわたる経験の結果として，人の一般化はどの程度に到達するかを見ることができるからである．実験室内の，しかも多少とも人工的な材料による，連続的かつ反復的な経験の結果としての一般化と，日常生活における自然的な材料による，偶発的かつ散発的ではあるが生活に密接した経験の結果としての一般化とは，同一のメカニズムにもとづき，同一の過程と見なさるべきものであるかどうかはすぐには決定できない問題である．しかし，結果はいづれであるにもせよ後者のような方向の研究もまた，学習ないしは思考における一般化の問題の中で一つの重要な位置を占めるものといえよう．

本研究は，大きく二つの部分にわけられる．ひとつは，日常経験の結果として成立した一般化の程度には，被験者の年令と性別とによつて，どのような差異が見られるか，の問題であり，他のひとつは，主として個人差

の問題，特に一般化の程度と性格との相関の問題である．両研究とも調査に用いられた質問紙ならびに調査方法は全く同様であるから，方法については次節でまとめて述べられる．但し，用いられた被験者は前者と後者で異つている．結果および結果の考察については，前者の研究に関しては第Ⅲ節に，後者に関しては第Ⅳ節に述べられる．また，一般化の程度は，本研究の場合，質問紙に対する解答を集計することによつて直接に算出され得るのであるが，このようにしてあらわされた一般化の程度は，果たして本節で前述したような厳密な意味における一般化の結果であるか，それとも「見かけだけ」の一般化にすぎないものの結果であるかについては，なお問題の残るところである．このような問題についての考察を含めて，一般的な考察は，第Ⅴ節にまとめて述べられる．

Ⅱ．方　　法

用いられた質問紙は，同様の質問形式からなる15項目の質問からなつている．

質問の作成に当つて，材料は，できる限り日常生活において誰でもふつうに経験している事項であつて，しかも，専門的ないしは特殊な知識によつて判断内容が一義的かつ公式論的に定まつてしまわないようなものがえらばれた．たとえば，自然現象などを材料とする場合には，日常経験に密接するものであつても，それらの現象については，多くの場合，学校の教科その他で学んだ自然科学的知識とも関連しており，そのために，被験者たちの教養なり一般的知識なりが解答に影響するおそれがあるために除外された．要するに，本研究の目的に沿うものであるためには，できる限り被験者たち個個人の主観的な経験の範囲内においてのみ判断がなされ，外界についての客観的な知識が判断に影響しないような材料を用いることが

必要である．そしてまたさらに，完全に排除することはできなかつたかも知れないが，できることなら，判断に際しては，どの程度に一般化するかに関して，被験者の個人的な好みも関係しないものであることが望ましい．

以上のような理由から，15項目の各質問の材料には架空の人物のなんらかの行為とその人のもつなんらかの特性とが用いられた。すなわち各項目ごとに，まずある人物のある行為が掲げられ，つぎに，そのような人物が，はたして，さらに一般的に言つて，ある種の特性の持主であると言えるか言えないかまた言えるとしたらどの程度のたしからしさでそのように言い切れるか，について4つの選択肢が設けられる．

用いられた15項目からなる質問紙は下の表の通りである．

Table 1. 質 問 項 目

1	Aは，電車の中で下(くだ)らない講談本を読んでいた。		だから，Aは，きつと，程度の低い人にちがいない．
			だから，Aは．たぶん，程度の低い人であろう．
			だから，Aは，もしかすると，程度の低い人かもしれない．
			しかし，Aは，程度の低い人であるとはかぎらない．
2	Bは，学校の成績(せいせき)がよい．		だから，Bは，きつと，あたまのよい人にちがいない．
			だから，Bは，たぶん，あたまのよい人であろう．
			だから，Bは，もしかすると，あたまのよい人かもしれない．
			しかし，Bは，あたまのよい人であるとはかぎらない．
3	Cは，ちよつとした地震でも，すぐに外にとび出した．		だから，Cは，何をするときでもあわてものにちがいない．
			だから，Cは，たいていのことをするときもあわてものであろう．
			だから，Cは，何か他のことをするときも，あわてものかもしれない．
			だからといつて，Cは，他のことをするときも，あわてものとはかぎらない．
			だから，Dは，決してうそなどつかない人にちがいない．

4	Dは，道で財布をひろつたとき，それをすぐに交番にとどけた．		だから，Dは，たぶんうそなどつかない人であろう．
			だから，Dは，うそなどつかない人かもしれない．
			だからといつて，Dは，うそをつかない人だとはかぎらない．
5	Eは，きようだいと仲のよい子である．		だから，Eは，きつと，友だちとも仲のよい子にちがいない．
			だから，Eは，たぶん，友だちとも仲のよい子であろう．
			だから，Eは，友だちとも仲がよいかもしれない．
			だからといつて，Eは，友だちとも仲がよいとはかぎらない．
6	Fは，あまいものが大好きで，よくあまいものをたべる．		だから，Fは，きつと歯がわるいにちがいない．
			だから，Fは，たぶん歯がわるいだろう．
			だから，Fは，歯がわるいかもしれない．
			だからといつて，Fは，歯がわるいとはかぎらない．
7	Gは，天才的なあたまの持主で，しかも勉強ばかりしている．		だから，Gは，きつと，からだの弱い人にちがいない．
			だから，Gは，たぶん，からだの弱い人であろう．
			だから，Gは，からだが弱いかもしれない．
			しかし，Gは，からだの弱い人であるとはかぎらない．
8	Hは，目つきのするどい人である．		だから，Hは，きつと，気のつよい人にちがいない．
			だから，Hは，たぶん，気のつよい人であろう．
			だから，Hは，気のつよい人であるかもしれない．
			だからといつて，Hは，気のつよい人であるとはかぎらない．
9	Iは，今日，こじきにお金をめぐんでやつた．		だから，Iは，だれに対しても，心のやさしい人にちがいない．
			だから，Iは，たいていの人に対して，心のやさしい人であろう．
			だから，Iは，他の人に対しても，心のやさしい人であるかもしれない．
			だからといつて，Iは，他の人に対しても，心のやさしい人とはかぎらない．
10	Jは，今日，とんでもないうそをついた．		だから，Jは，きつと，どろぼうになるにちがいない．
			だから，Jは，たぶん，どろぼうになるだろう．
			だから，Jは，どろぼうになるかもしれない．

			しかし，Jが，どろぼうになるとはかぎらない．
11	Kは，冬の寒い日でも，平気でうす着ですごしている．		だから，Kは，きつと，からだの丈夫な人にちがいない．
			だから，Kは，たぶん，からだの丈夫な人であろう．
			だから，Kは，もしかすると，からだの丈夫な人かもしれない．
			だからといつて，Kは，からだの丈夫な人とはかぎらない．
12	Lは，ときどき，わすれものをしてくる．		だから，Lは，何をするにも不注意な人にちがいない．
			だから，Lは，不注意なことの多い人であろう．
			だから，Lは，あまり注意ぶかくない人かもしれない．
			だからといつて，Lは，いつも不注意だとはかぎらない．
13	Mは，絵をかくのが上手である．		だから，Mは，何をするにも器用な人にちがいない．
			だから，Mは，たいていのことをするにも器用であろう．
			だから，Mは，何か他のことをするにも器用な人かもしれない．
			だからといつて，Nは，他のことをするにも器用とはかぎらない．
14	Nは，友だちからの手紙には，すぐに返事をかく人である．		だから，Nは，約束をキチンとまもる人にちがいない．
			だから，Nは，多くの場合約束をまもる人であろう．
			だから，Nは，比較的，約束をまもる人かもしれない．
			だからといつて，Nは，約束をよくまもる人とはかぎらない．
15	Oは，このごろ，急に，ことばづかいが荒つぽくなつた．		だから，Oは，きつと，不良の仲間入りをしたにちがいない．
			だから，Oは，たぶん，不良の仲間入りをしたのだろう．
			だから，Oは，もしかすると，不良の仲間入りをしたのかもしれない．
			だからといつて，Oは，不良の仲間入りをしたのだとはかぎらない．

このように，各項目において，右欄の4つの選択肢のうちの最初のものは，「だから，……にちがいない」という表現で述べられてあり，左欄に掲げられてあるその人物の具体的な行為からの推定としては，最も決定的にその人物のある種の特性を断定した選択肢であり，その意味において，

被験者がもしこの選択肢を選んだとすれば，彼の判断は最も一般化の甚だしい判断であるということになる．それに対して，4つのうち最後の選択肢は「だからといつて，……とは限らない」という表現になつており，左欄に掲げられた具体的行為からはなんらそのような特性の存在を推定し得ないこと，いいかえれば一般化し得ないことを意味している．

上の質問は，学年，氏名，性別の欄とともに一枚の半紙に印刷され，調査は，学級単位にふつうの教室に集合した被験者群に対し集団的に行われた．

第1次調査に用いられた被験者は，慶応義塾内中学校2年，高等学校1年，3年の生徒で，学年別，男女別の実数は Table 2 の通りである．

Table 2.　第1次調査における被験者数

	男　子	女　子	計
高校3年	44	39	83
高校1年	46	42	88
中学2年	48	38	86
計	138	119	257

また，第2次調査においては，慶応義塾大学第1学年男子学生（経済学部，法学部）200名が用いられた．

用紙が配布された後，実験者によつて次のような指示があたえられた．

「ここに15項目からなる質問が印刷されてあります．どの項目もやり方は全く同様です．例として1番の問題について説明しますと，1番の左の

欄に『Aは電車の中で，下らない講談本を読んでいた』という文章がありますが，あなたがもしAという人がそのようなことをしているのを見たとき，Aという人物についてどのような人物の人であると考えるかを，右の欄にあげられてある4つの選択肢のうちからどれかひとつを選んで答えていただきたいのです．右の欄の選択肢を上から見てゆきますと，一番最初のものでは，『だから，Aは，きつと，程度の低い人にちがいない』となつており，二番目のものでは，『たぶん，…であろう』三番目では『もしかすると，…かもしれない』となつて，最後の選択肢では，『しかし，（またはだからといつて），Aは，程度の低い人であるとはかぎらない』となつています．このように，どの項目も，4つの選択肢は同じように上から順番にならんでいますので，それぞれの項目について，あなた自身の考えにいちばんピッタリするものをひとつだけ選んで，その文章のはじめの空欄に○印をつけて下さい．但しこの調査は，あなたがたのあたまのよさや，考え方のよしあしを問題にするのではありません．また，どの選択肢を選ぶのが正しいかということもきまつているわけではなく，つまり模範解答はどこにもないのです．ですから，御自分の思つた通りをそのまま選んで下さい．もうひとつ最後に，それらの質問に対して答えるときに，あまりに深く考えすぎると迷つてしまつて，どれを選んでよいかわからなくなります．ですから，あまり深く考えすぎないで，何人かの友だちと，誰かについてのうわさばなしの雑談でもしているときのような軽い気持で答えて下さい．」

回答時間については特に制限を設けなかつたが，中学2年生の場合でも大凡正味20分以内には全員が回答して提出した．全員が，殆んど大した困難もなく回答し，内容についての質問も殆んどなかつた．

なお，第2次調査の集計に必要な副次的なデータとしては，昭和35年

4月大学入学の第1学年全員に対し，慶応義塾大学学生部日吉支部において作成し実施された性格検査の結果が用いられた．この検査は，205項目の質問からなる質問紙法の検査であつて，検査結果は，1．神経症的傾向，2．内向性，3．外向性，4．安定性，5．満足性，6．過敏性 7．衝動性，8．行動性，9．固執性，10．顕揚性・発揚性，11．社交性，12．可塑性．13．開放性の13種の性格特性別に粗点ならびにパーセンタイル（塾生を母集団とした）得点が算出されるようになつている．この性格検査は心理学を専門とする者5人が逐条的に討議を重ねつつ作成したものであり，項目数が十分に多いところから信頼度は十分に高いことが予期され得るが，妥当性に関しては目下検討中である．(註2)

III. 一般化判断の性差と年令差

性差と年令差に関する集計は，中学生と高校生合計257名（Table 2参照）についての第1次調査の結果について行われた．

集計に当つては，まず15項目のそれぞれについて，4つの選択肢のうち最初のもの，すなわち，

だから，…きつと，…にちがいない．

を選んだ場合には，　3点

以下，

だから，…たぶん，…であろう．　2点

だから，…もしかすると，…かもしれない．　1点

しかし（だからといつて），…とはかぎらない．　0点

というように配点したが，これらの得点をここで一般化得点と呼ぶことにする．4つの選択肢について，上のように全く等間隔に配点することには疑問もあるが，最初の試みではあり，一応のめやすとしてこのようにする他はなかつた．

個人の一般化得点は，項目毎の一般化得点を15項目全体にわたつて，単純に合計することによつて算出された．この個人の一般化得点について学年別，男女別に平均と標準偏差とを算出したところ Table 3 のようになつた．

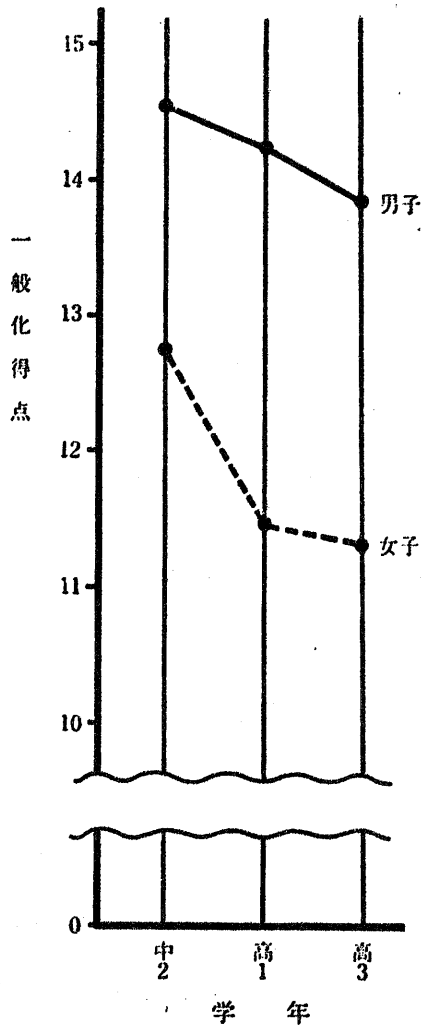
Table 3. 群別平均得点および標準偏差

	男子 M	男子 σ	女子 M	女子 σ	総平均
高校3年	13.82	5.59	11.31	6.88	12.64
高校1年	14.22	6.48	11.45	5.76	12.90
中学2年	14.52	6.29	12.74	6.24	13.73
総平均	14.20		11.82		13.09

この Table 3 の平均得点について図示すれば，次の Fig. 1 如くである．

Fig. 1 によつて見ると，男子と女子の間には，どの学年についてみても差があり，一般化得点の平均値はすべての学年において，男子よりも女子の方が小となつている．F検定の結果，このような性的差異は1パーセント以下の水準で有意であり，一般化判断の傾向は，明らかに男子の方が強いと結論し得る．しかしながら，ここで，このような結果からただちに，男子の方が女子よりも，日常生活において経験する事象に関して抽象力においてすぐれた見方をしているからであると結論することはできない．な

Fig. 1　Table 3 の図示



ぜなら，このたびのような調査方法においては必ずしも，第Ⅰ節において述べたような，抽象を前提とした厳密な意味での一般化過程のみを測定しているとは限らず，たんなる見かけ上の一般化傾向も混入しているものと見なければならない(注1)からである．いいかえれば，ともすると，このたびのような結果には，例えば男子の判断の独断的傾向，女子の判断に際しての臆病さといつた傾向なども反映しているかも知れないのである．

同じく Fig. 1 について見ると，学年的にも傾向的な差が見られ，男女とも学年が進むにしたがつて，一般化傾向が減少してゆく傾向を示している．しかしながら，この学年的な傾向は，F検定の結果では，5パーセントの水準においても有意ではなかつた．有意ではないまでも，傾向としてはこのような差が見られたことについてはなんらかの考察が可能であるが，それについては，次の第2次調査の結果を見た後に，第Ⅴ節に述べることとする．

Ⅳ　一般化判断と個人差

すでに，第Ⅱ節方法の項で述べたように，第2次調査は大学1年200名を対象として，調査方法は第1次調査と全く同様に行われた．大学生を対象にする限りでは，質問紙に用いられている言葉づかいはやや幼稚である

が，条件を同一にするために，中学，高校生向けの質問紙がそのまま用いられ，指示をあたえるに際して，その旨の説明がつけ加えられた．

第1次調査の場合と同様の仕方で集計がなされ200名の大学生における個人の一般化得点の平均値と標準偏差は下の如くであつた．（すでに述べたように，大学生は男子のみが対象とされたので，男女の比較はできない．）

$$\begin{cases} M = 15.42 \\ \sigma = 5.47 \end{cases}$$

この平均値の数値は第1次調査の結果得られた中学，高校生男子のいずれの平均値よりも大である．このような結果についての考察は，しかしながら，ここでは保留し，次の第V節で論ずることにする．

つぎに，本調査の結果得られた個人別の一般化得点がはたしてどの程度に恒常性のあるものであるかを見るために，折半法による検査の信頼度の算出法と同様の方法にしたがつて，第1項目を除いて，各個人における偶数番目の項目（すなわち，第2，4，6，8，10，12，14項目）の合計得点と奇数番目の項目（すなわち，第3，5，7，9，11，13，15項目）の合計得点との間の相関係数を算出し，スピアマン・ブラウンの公式によりRを計算したところ，

$$R = 0.673$$

となつた．したがつて，このRの値は，本質問紙を15項目からなる一種の検査法とみなした場合の検査の信頼度係数に相当するものであるが，信頼度係数としては決して十分に高い数値とは言えない．そして，このようになつた主な理由はおそらく質問項目数が僅か15項目に限られていたことによるものであろう，その意味で，本質問紙は，このままの形では到底，検査法の名に値するものとは言えないが，ここで見方をかえて，この同じRの数値を15項目に対して個個人があたえた反応の恒常性の程度を

示すものとしてながめなおしてみると，ここにある程度の意義をみとめることができる．すなわち，それぞれの質問項目は，等しく人物の具体的な行為とその人物のある種の特性との間の関係を問題にしているのであるが，設定された行為およびその行為者の特性といつた素材は，各質問項目相互の間で質的に全く異つている．それにもかかわらず，15項目全体に対する個人の一般化得点としては，かなりの恒常性がみとめられうるということは，思考における一般化の程度には少なからざる個人差があり，しかもその個人差は，思考材料の質的な差異とは多少とも無関係に作用するところの，個人に附随しあるいは内在しているものであることを示している．いいかえれば，われわれは，少数の質問項目におけるある個人の判断傾向から，他の質問項目に対してどの程度に一般化判断の傾向を示すかをある程度のたしからしさを以つて予測することもできるということを意味している．

以上の結果のように，本質問紙のような方法によつて見出された一般化判断の傾向が，その強度に関して，個人において多少とも恒常に保たれる傾向を示すということから，つぎにただちに問題となることは，それならばこのような個人的特性は，その個人のもつ他の行動特性，特に性格的な諸特性との間にどの程度に密接な関係があるだろうか，ということである．いいかえれば，一般化して判断する傾向が強いか弱いかということは，ある種の性格特性の強度との間に相関があるものなのか，それともないのか，あるとすればどの程度の相関があるのか，の問題である．

この問題に解決をあたえるために，このたび第2次調査の対象とされた学生200名のすべてについて，彼等が昭和35年4月入学直後に前述の学生部による性格検査に対してあたえた性格特性別の得点（粗点）がとり出され資料とされた．但し，性格検査が実施された時期と，本調査が実施された時期との間には約2ヶ月の間隔があり，後者の方が後に実施された．

すでに述べたように，性格検査の方は13箇の特性に関して得点が得られるようになつているが，本調査結果による一般化得点と，各性格特性に関する得点との間の相関係数を計算したところ結果は Table 4 のようになつた．

Table 4

一般化得点と性格特性別得点との相関係数（r）

	一般化得点
1. 神経症的傾向	0.008
2. 内向性	— 0.015
3. 外向性	— 0.017
4. 安定性	— 0.002
5. 満足性	0.002
6. 過敏性	0.051
7. 衝動性	0.010
8. 行動性	0.084
9. 固執性	0.048
10. 顕揚性・発揚性	— 0.036
11. 社交性	0.030
12. 可塑性	— 0.002
13. 開放性	0.022

このTable 4に示された相関係数の数値はいずれを見ても極めて小であり，±0.1に達するものさえ皆無である．この結果は，実は，筆者自身があらかじめ，心に抱いていた「一般化判断の傾向はなんらかの性格の反映としてあらわれて来るのではないか」というひそかな期待を完全に裏切る

ものであつた．そして結果からして，期待とはむしろ逆に，一般化の程度は個人の性格とは無関係であると結論されなくてはならない．

以上第2次調査の結果を綜合して考察してみると，一般化判断の傾向には明らかに個人差があり，しかもその傾向にはある程度の恒常性が見られるにもかかわらず，その傾向の強さと各種の性格特性との間には殆んど相関がないということになる．このことから，われわれは，一般化判断の傾向は，個人に附随していながらも，その個人の性格特性とは異つた別個の個人的特性であると結論せざるを得ない．

V. 考　　察

第1次調査の結果と第2次調査の結果とを総合してながめたとき，まず目につくことは，男子の被験者のみの一般化得点の年令的変化である．すなわち一般化得点の平均値は，

中学2年	14.52
高校1年	14.22
高校3年	13.82
大学1年	15.42

となつて，中学2年から高校3年までは年令がすすむとともに，単調に減少してゆくのに対して，大学1年では急激に増大している．但し，第Ⅲ節で述べたように，中学2年から高校3年までのこの減少傾向は，女子の被験者の結果と平行して見られたものであつたにもかかわらず，F検定の結果では有意な傾向とは言い得なかつたのであるが，それにしても，高校3年から大学1年に至る急激な増大傾向は無視し得ない変化である．もつとも，高校3年と大学1年との間の平均値の差についてCR（臨界比）を算出してみると，

CR = 1.26

となつて，この場合でも，5パーセント水準では有意差ありとは言い得なかつた．しかしかりに10パーセントまでの危険率を認めるなら差があると見なしうる程の結果である．高校3年と大学1年との間に，差があるとみとめるとして，その理由を考察してみるならば，おそらくつぎの2つの要因が最もありがちな理由としてあげられうる．

すなわちそのひとつは，質問に対して回答するときの被験者たちの態度である．というのは，大学生についての調査は，大学における心理学の授業の時間に，しかも，心理学の教師たる筆者が実験者となつて行われたのに対し，高校生その他の場合には，心理学の授業時間でもなければ，また実験たる筆者が何の専門であるかも知らされないままに行われたということである．すなわち，調査時には，大学生の被験者のみがいわば「心理学的な」態度をもつて質問に回答をあたえたのかも知れない．このように仮定するならば，質問項目に用いられている材料は，人の行動ないしは人の特性であり，少くとも見かけの上では心理学的対象の一部に属しているので，被験者たちは無意識的にか意識的にか，そこになんらかの因果関係を幾分かでも見出だそうとする態度をとることになり，その結果として一般化得点が増大したのかも知れない．

もうひとつの考えられる要因は，こんどは主として高校生に作用する要因である．すなわち，青年期中期の一特徴であるところの主観的かつ他人に対する懐疑主義的傾向のあらわれとして，高校生における一般化得点が低められたのかも知れないということである．懐疑主義的とまでいかなくとも，現実の諸問題を見る見方がある程度純粋で，理論的に厳正主義的であつても，一般化得点を低める方向に作用するともいえる．これに対し，大学生になると青年期後期に入り，その時期にはある程度客観をも容認する態度となり，現実の問題に対しても相当程度実用主義的な態度をもつて

処理することとなり，そのために他人を見る眼も多分に分節的かつ類型的な見方をすることができるようになつたことが，このたびの一般化得点の増大をもたらしたのであるかも知れない．

しかしながら，一般化得点の年令的変化についての上のような考察はたんに試案的な仮説であるにすぎない．まして，結果にあらわれた年令的な変化は統計的に有意ではなかつたのであるから，上に述べたような仮説の検証は今後の別箇の研究問題として残しておかざるを得ない．

結果の全体を通覧したとき，つぎにとりあげらるべき重要な問題は，一般化得点というものが，第2次調査の結果では明らかに，いかなる性格特性との間にも殆んど相関が見られなかつたにもかかわらず，第1次調査の結果では，その得点において男女の間に，統計的にも有意な明瞭な差があり男子の方が女子よりも強い一般化傾向を示していたという点である．いいかえれば，一般化得点は男女の間に差があり，ある意味で，この得点が高いことは男性的特性の反映であり，低いことは女性的特性の反映であるとも見られるのに対し，この得点の高低はいかなる性格特性の反映でもないのである，それならば，男性的特性といい女性的特性といつても，これらの特性は一般の各種の性格特性とは全く無関係なのではないかということが，上の考察からの当然の帰結として推定されることになる，そして，実際にも，このような推定の妥当なことは，このたび用いられた性格検査結果の性的差異の吟味からも裏づけられた すなわち，第1学年男女塾生全員に対して性格検査が実施された後，相当数の標本について，男女別に各性格特性ごとの分布表が作られ，特に男女間の平均点が比較された結果では，いずれの性格特性に関しても殆んど性差が見られなかつたのである．(注3) しかしながら，さらに考えてみると，このような結果は，内省法を媒介とする質問紙法による性格検査の欠陥に伴う，見かけ上の結果にすぎないといえる．たとえばひとつの質問に対して被験者が自己を内省して回答

を行う場合に，プラスの回答をすべきかマイナスの回答をすべきかを決定するに当つては，おのづからある基準を設定しそれにもとづくことが必要であり，そしてその基準は，常に経験上の自己の周囲の人人から得られるわけであるが，おそらくは，経験上の人人のすべてではなくして，被験者が男子であれば経験上の男子群の中から基準が設定され，女子であれば女子群から基準が設定されることになるであろう．したがつて，それら男女において異つた基準にもとづいてあたえられた回答である限りにおいて，それらの回答を集計して得られた数値は，決して男性的特性をも女性的特性をも反映しない結果となる筈である．性格検査の結果，どの特性に関しても殆んど性差が見られなかつたのはこのような理由によるものであり，したがつて，性格に性差が「ない」ように見えたのは，質問紙法による性格検査のひとつの限界を示す以外の何ものでもないと考えられる．

それに対して，このたびの第1次ならびに第2次調査に用いられた質問紙は，形式としては性格検査と同様に質問紙でありながら，被験者の内省を媒介としていないという点で異つている．本調査結果に男性的特性，女性的特性が反映したのはこのような理由によるものといえる．

それにしても，第2次調査の結果において，本調査による一般化得点がいかなる性格特性とも相関を示さなかつたことはひとつの著るしい事実である．このことから，さらに一般的に，少くとも日常生活において偶発的に，互に多少とも異つた形式で生起する具体的な事象の中から，どの程度に共通的な要素を抽象し，その結果としてそれぞれの個個の事象をどの程度に一般化してどの程度に包括的な概念に到達し得ているか，ということには，その人個人の性格の如何は殆んど何の関係もないにちがいない，と結論し得る．

そうであるとするならば，上述のような傾向における個人差は如何にして生ずるのであろうか．この問いに対して，試案的なものであるにもせ

よなんらかの解答を試みるためには，再び第Ⅰ節において述べられた考察にもどつて考えてみる必要がある．すなわち，真の意味における一般化の過程は，実験室的実験の場合においては，多少とも変異性のある刺激をつぎつぎとあたえてゆくことによつて追究されうるということであつた．ところが，日常生活上の事象を素材として用いた本研究の場合においては，刺激をあたえてゆくという実験段階は省略され，その段階の部分は，被験者自身のこれまでの個人的な経験に任かされているのだ，ということもすでに述べたところである．しかしながら．どちらの場合においても，有機体における抽象の過程ならびに抽象を前提とする一般化の過程は，有機体が変異性のある刺激をつぎつぎとあたえられてゆく段階，あるいは日常生活において偶発的にあたえられる経験をつみ重ねてゆく段階において完成されてゆくのであつて，実験の後段たる観察の段階，あるいは質問紙に対して回答をあたえる段階において多少とも瞬間的に生起するのではないと考えられる．したがつて，実験的方法による場合においては，観察段階において認められた有機体の一般化過程の強度の上になんらかの個体差が見出されるならば，その理由は，当然，学習または経験段階における経験の仕方の差異の中に求められるのであつて，決してたんなる観察段階における有機体の反応傾向の個体差に求められはしない．丁度そのように，本研究の場合にあつても，被験者の一般化傾向の個人差は，厳密な意味における一般化過程を問題とする限りにおいて，その要因を，被験者自身のこれまでの数年ないしは十数年にわたる個人的な経験に際しての経験の仕方の差異の中に求めらるべきであつて，質問紙に対して回答する瞬間において作用する反応様式の個人差の中に求めらるべきではない．このように考えてみるときに，はじめて，このたびの結果において一般化傾向と性格特性との間に殆んど相関のなかつた事実に対して説明があたえられうるように思う．なぜなら，性格特性としてあげられたものは，いずれも，どちらか

といえば，場面に対して多少とも瞬間的に行われる反応様式に関する項目の総和によつてあらわされるものであるからである．そしてまた，一般化傾向の上に明らかな男女差があらわれたことに対する説明もまた，上述の説明がそのままあてはまるように思われる．なぜなら，日常生活における経験のあたえられ方は，同一素材の場合であつても，男子に対してと女子に対してとでは，おのづから，その度びごとに異つた仕方であたえられているように見えるからである．

しかしながら，上に述べた「経験の仕方」あるいは「経験のあたえられ方」と，それら個個の経験のつみ重ねに伴う抽象過程ないしは一般化過程との間に，直接的にどのような因果関係があるかについては，改めて研究さるべき重要な課題である．ここで，この問題に関し，なんらの実験的裏づけをもたないままに，仮説的にもせよ，これ以上につつこんだ臆測を試みることは，本論文の限界をこえるものといえよう．ともかく，ここでは，上述のような形で，一般化判断の問題における今後の重要な研究方向の一つを示唆しておくにとどめる．

（1960年8月31日稿）

文　献

1. Humphrey, G. *Thinking—an introduction to its experimental psychology*, 1951.
2. Fisher, S.C. The Process of Generalizing Abstraction; and its Product, the General Concept, *Psychol. Monogr.* **21**, 1916.
3. Hull, C. L. Quantitative Aspects of the Evolution of Concepts, *Psychol. Monogr.* **28**, 1920.
4. Heidbreder, E. F. An Experimental Study of Thinking, *Arch. Psychol.* **11**, 1924.

注 1. したがつて，このような定義による一般化には，有機体における抽象過程と表裏をなさないたんなる「見かけの」一般化は含まれないこととなる。

たとえば，条件反射における汎化は，上に定義された一般化と同様の過程であるかどうかは疑がわしいし，また，有機体によつてなされる多少とも不適応的な紋切型の反応，あるいは，場面の細目を無視し真の相違点を区別しそこなつたことによるある意味での独断にもとづいた反応なども，厳密な意味における一般化とは言えない．しかしながら，実験的には，有機体の行動ないしは反応形式の上から，そこに見られたものが厳密な意味での一般化であるのか，それともたんなる見かけ上の一般化にすぎないのであるかを区別することは必ずしも容易でない．

2. この性格検査の作成者は，慶応義塾大学助教授，太田垣瑞一郎，吉田俊郎，武蔵工業大学助教授，山崎恒夫，慶応義塾大学学生部学生相談室員，平野馨の4君ならびに筆者である．
3. 性格検査結果についての男女差の検討は主として上記平野馨君によつて行われた．